

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、18ヶ国60の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「ところどころだの飢餓」に応える働きをしています。

❖ 書き損じはがきで国際協力

年賀状などの「書き損じはがき」をお送りください。お送りいただいたはがきは、当機構の海外スタッフを支えるために、スタッフへの郵便物発送や、スタッフ支援会への連絡および事務作業に用いさせていただきます。お問い合わせは大阪事務所まで。なお、書き損じはがきは、郵便局側が発行したもので、ポストに未投函（消印のないもの）のものに限ります。

 里子訪問ツアーのご案内
フィリピン・パリパラン地区

日程：2012年5月18～21日
フィリピン・パリパラン地区の里子を訪問します。5月19日には同地区のクロージングセレモニーに参加予定。詳しくは今後お知らせします。問い合わせは、大阪事務所まで。

海外で活動を目指す方のために
「第 29 回」ハンガーゼロ・ファッション・トレーナー・トレーニング

(旧称 オリエンテーショントレーニング)

当機構を通して海外パートナーとともに活動を希望する方々や、国際協力に関心をお持ちの方々のための学びと準備の機会です。ご参加お待ちしております。

日時：3月19日(月)～24日(土)
会場：東京基督教大学(TCU)
千葉県印西市内野
費用：37,000円
(テキスト代5,000円を含む)
定員：12名
お問い合わせは…
東京事務所 ☎ 03(3518) 0781
福地まで。

ハンガーゼロ・サポーター大募集中！

**今すぐ▶▶▶
各種支援の
お申し込み
ができます!!**

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。

お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ☐ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月（ ）口 （1口 1,000 円）
- ☐ チャイルド・サポーター（世界里親会）になりたいので説明書（申込書）を送ってください。
- ☐ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月（ ）口 （1口 1,000 円）
- ☐ JIFH（日本国際飢餓対策機構）サポーターとして協力します。
毎月（ ）口 （1口 500 円）
- ☐ 金融機関の自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名： 男・女

フリガナ
住所：

(電話) _____

▼申込日： 年 月 日▼

FAX • 072-920-2155

当機構の東日本大震災の復興支援活動を応援していただいている中京医薬品が協賛で2011年12月14日、愛知県芸術劇場において「きすなASSIST コンサート「市民合唱団による悠久の第9」(指揮：齊藤一郎、セントラル愛知交響楽団)を開催、会場内で復興支援活動報告と募金が行われました。

コンサート開演前に当機構の清家
常務理事が挨拶に立ち「置き薬プロ
グラムを通して被災された600世
帯に対して、長期的な視点で健康面
でのケアが実現しました」と、同社



との協力関係が大きな力となったことを報告しました。コンサート後には多くの来会者が JIFH ブースに來られ、東日本のために 81,048 円の募金が寄せられました。なおコンサートの模様は、主催者のエフエム愛知が 12 月 25 日に放送しました。

ハンガーゼロ・サポーター 1770口。さらに運動をひろげていきましょう！



日本国際飢餓対策機構

2012 No.258

1

飢餓対策News



飢餓対策機構ボリビアの活動地のひとつヤルビコヤ小学校にて、右にボリビア駐在の小西小百合（4、5面に記事）

新年明けましておめでとうございます。昨年も皆さまのご支援を賜り、まことにありがとうございます。特に昨年は、3月11日に襲った東日本大震災と津波の甚大な被害に際して、当機構も二日後の13日から救援・復興活動を開始しました。まだ雪が降る東北の地で、想像もできないほどの痛みと苦しみ、また私たちが暮らすこの日本で電気や水道などのライフラインが断たれ、寒さと飢えて死を覚悟するという現実を、多くの方々が経験されました。ハンガーゼロ・アフリカで取り組んでいることが、まさにこの日本でも必要となったのです。

しかし、私たちの活動の背後にあって数えきれないほどの皆様のご協力を頂くことができましたことを心から感謝致します。

愛の「絆」

さて、その震災を経験した日本が昨年選んだ漢字は「絆」でした。その背景にはやはり、地震と津波のことがあるのは自明のことです。最も苦しく、困難な試練の中から、今までにはなかった絆、忘れられていた絆、壊れていた絆が、もう一度生み出されました。「全てのことに働いて、益としてくださる」神様の導きが確かにあったのです。日本という豊かな国のその豊さが、あんなにも早く、一瞬で消えてなくなるものであることを多くの人は体験し、またそのことを痛感することができました。しかし、

すでに「のど元過ぎれば」になっていないでしょうか。今、
私たちに必要なことは行動することです。

世界では毎日、あの震災と津波で亡くなった方々と同じ数の人々が、いや、それ以上の方々がおなかをすかせて亡くなっています。子どもたちがうわごとで食べ物を求めながら、母親の前で亡くなっているのです。

震災で多くの涙が流されました。しかし、その涙の一粒ひと粒が合わさって、「絆」という河が生まれてきました。アフリカでは今もなお冷たい涙が流されています。しかし、「絆」を学んだ私たちが、その現実を見て聞いて一緒に涙を流し、少しの犠牲を払っていくならば、必ずや大きな愛の「絆」の河は、渇いたアフリカの大地にも流れることと信じます。

日本ではニュースにも取り上げられない飢餓の波が、今アフリカを襲っています。その叫びをJIFHは今年も皆さまにお伝えしてゆきます。聞いて下さり、感じて下さり、心を動かして下さい、お祈りくださり、また、ハンガーゼロ・サポータとなってご支援くださいますように、心からお願い申し上げます。

『そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。』（聖書）

日本国際飢餓対策機構 理事長 岩橋竜介

1 分間に 17 人 (うち 12 人が子ども) ・1 日に 2 万 5 千人・1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。

- | | | |
|-------|----------------------------|---|
| ■発行者 | 岩橋竜介 | |
| ■発行所 | 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構 | |
| | Web サイトアドレス | http://www.jifh.org/ |
| | e メールアドレス | general@jifh.org |
| ■募金方法 | ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで | |

大 阪 〒 581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155

東 京 〒 101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 517 号室
TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782

愛 知 〒 466-0064 名古屋市中区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F
TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114

広 島 〒 731-0103 広島市安佐南区緑井 2-21-23 201号
TEL (082)831-1214 FAX (082)877-3961

沖 縄 〒 901-0156 那覇市田原 3-8-1 ユリ香ハウス 201号
TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540

東 北 〒 980-0012 仙台市青葉区錦町 1- 13- 6エマオ2階E
TEL (022)217-4611 FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。

身近に
便利に
なりました



- 郵便振替 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構
- 他の金融機関からの自動振替 ●クレジット、デジタルコンビニ

アフリカの人々を襲う飢餓 ニジェール食糧危機さらに深刻に



2011年7月にマリニティ地区で行われた食糧配給の様子

ハンガーゼロ
・サポーター
大募集

ハンガーゼロ・アフリカは現在、とくに東西アフリカの緊急的な食糧の必要に応えています。



マリニティの子どもたち

国土の半分以上をサハラ砂漠が占めるニジェールでは数年ごとに大規模な食糧不足が発生しています。2005年、天候不順とイナゴの大発生のため300万人が飢餓を経験しました。2009-2010年にも収穫期に干ばつと大雨が続き、国連が大規模な食糧危機の発生を警告しました。この状況に対し日本国際飢餓対策機構は2010年、2011年と続けて現地パートナー、バルナバスファンドを通じて緊急食糧支援を行いました。

家畜の9割失うケースも

けれども、2009年以来毎年天候不順が続き、農作物の生産は消費を大きく下回っているため、2012年には、人々はさらに厳しい状況に追い込まれることが予想されています。この数年の天候不順と食糧難のため、小規模な牧畜で生計を立ててきた人々は家畜の9割を失ったといわれています。

さらに北に隣接するリビアから政情不安を逃れてニジェールに20万人以上の難民が流入、厳しい状況にあるニジェールの人々に追い打ちをかけることになりました。

国連は、2012年にはニジェールの食糧危機が2005年、2010年の規模を超えるだろうと警告しています。2011年11月現在、国内の半数に当たる6,981の村落では食糧の入手が困難になりつつあり、西部地域では深刻な栄養不足に陥る子どもの割合がすでに13%を超えたといわれています。

過去最悪の食糧危機を危惧

当機構と共に支援活動に携わる現地教会のリーダー、ジャック・カンニデ牧師も「2012年は、これまでの危機をさらに上回る食糧危機が予測され、ニジェール政府も全国で50万トン以上の穀物が不足、アガデス、ディファ、ジンデル、ニアメの各地域では特に食糧

不足が深刻になると言っている」と報告しています。

ソマリアを始めとする東アフリカの飢餓が続く中、西アフリカの人々を襲うこの困難に対し、日本国際飢餓対策機構は現地パートナーとの協力関係をさらに深め、支援活動が続けていきます。

日本ではほとんど知られていない、慢性的な飢餓に苦しむニジェールやソマリアをはじめとするアフリカの人々に手を差し伸べるには、皆様のご支援が必要です。ハンガーゼロ・アフリカのパートナーとなって、ご協力を切にお願いいたします。



標高3千m近くの山岳地にあるチベット族のサーロン村の農耕風景



中上幸三・敏子

●雲南プログラム
雲南省シャングリラの辺境の農村コミュニティと小学校をベースにした自立開発プロジェクトの協力・支援、ボランティア教師による英語訓練プログラムの推進。

「雲南プログラム」収束

中華人民共和国
駐在 中上幸三・敏子

活動を開始した10年前は、徒歩や馬、ラバなどでしか訪れることのできなかった奥地の村々に、今では道路が通じるようになりました。道のりは依然険しく遠いですが、村人たちの交通手段は大いに改善しました。かつては夜の数時間だけしか使えなかった電気も、約2年前から24時間利用できるようになりました。山岳地帯に散在する村々で生活を営むチベット族の人々の生活環境の厳しさは今も変わりませんが、生活条件は随分改善し向上しました。

子どもたちの教育面では、政府によって地域の農村家庭の子女に『生活費補助』が支給され、義務

教育がより徹底して実施されるようになりました。地元政府の予算は不十分でも、先に発展した地域から多額の資金が融通されて、国全体の経済成長の恩恵が雲南省の奥地にも届くようになってきています。

子どもの環境も大きく変化

山岳地帯に散在する集落や、地域にある多くの小規模小学校（分校）で、老朽化した校舎の建て替えや設備の補充、改善など、その時々が必要とされる支援や協力を私たちは行ってきました。しかし近年、政府による学校の統廃合が推進され、村の分校は全て廃校となり、代わりに生徒数千人規模の巨大な小学校が新しく建設されました。その結果、地域の子もたち全員が新しい学校一校に集中して学ぶようになりました。当然生徒たちの通学は不可能で、1年生から6年生まで全員が学校内の寄宿舎に生活をして学ぶことになりました。

これからも一つの家族として

チベット族の人々との交わりや、村々での様々なプロジェクトを振り返って、特に印象深いのは、おとなも子どもも非常にたくましく、同時に心の優しい人々であるということです。個々の家族は勿論のこと、村人たち同士の関係が密で、村全体がまるで一つの家族のように思えるほどです。力を出し合って村のために何かをするというのは、村人たちにとっては特別なことではなくて、むしろ当たり前のこと。互いに助け合い支えあってこそ、厳しい環境の中で人々は共に生きて行くことが出来る。奥地での生活を通して、村人たちはそのことを学びとってきたに違いありません。子どもや青年たちの教育が更に進み、やがて経済的な豊かさを享受するようになって、人々が心の優しさや思いやり支えあう気持ちを忘れず、持ち続けて欲しいと私たちは願っています。



チベット族の村マオティンの子やもたちも成長

ご報告

1999年より海外駐在員として活動してきました中上幸三・敏子夫妻は、2011年末をもって当機構での働きを終えました。JIFH草創期からの夫妻の働きに感謝するとともに、ご支援を続けていただきました皆様に感謝いたします。

●ニジェールの人々を応援するハンガーゼロ・サポーターを募集しています。郵便、銀行、クレジットカードも利用可

チャヤの奇跡から広がる地域変革

FHIボリビアとJIFHの12年のチャレンジが結実

2011年11月21日午前9時30分、標高4,400mから見上げる空は、手が届くほどに近く、雲ひとつない澄み渡った青空。FHIボリビアのスタッフハウス前から学校までの約200mの整備された道をマーチングバンドを先頭に、軽快な演奏に導かれてラクヨスクールの生徒全員による行進が始まりました。チャヤ地域のクロージングセレモニーのスタートです。

1999年から始まったコチャバンバ州タパカリ郡チャヤ地域での世界里親会（CDP）の働きは、国際飢餓対策機構ボリビア（FHIB）と地域との共働で子どもたちの教育支

援、地域の開発に力を注いできました。12年の長きにわたる活動を終え、いよいよ地元の人々にゆだねる時が来たのです。

クロージングセレモニーには、ラクヨ地区教育ディレクターやタパカリ郡政府議員、チャヤ地域の政府最高責任者・副郡長、もと里子など、この地域にゆかりのある方々のスピーチが行われました。皆異口同音に、日本の里親の皆様やJIFHを通してなされた多くの支援に対する感謝の言葉が語られました。

「12年前、ここチャヤには殆んど何もありませんでした。高校も、学校寮も、整備された道もなかったのです。でもFHボリビアがチャヤに入って来てくれて、地域政府や地域の人々と共に働いて下さったおかげで、チャヤはこんなに発展しました。ラクヨスクールの化学教室、コンピューター教室、ヤルビコヤ小学校のシャワーとトイレ建設、また保健衛生指導、地域教会への支援ほか、様々なトレーニングやオリエンテーションを実施して下さったことを感謝しています。」「私はこのラクヨ高校の卒業生でJIFH世界里親会の元里子でした。私が小学生のときはまだまだ女の子が勉強を続けるのが困難な時代でした。私は家事

や家畜の世話をしながら、“学校へ戻りたい。勉強したい。なぜ女の子は勉強できて女の子はできないの”と思いながら毎日泣いていました。そんな時FHのスタッフが家庭訪問のたびに“シリラ、なぜ勉強し



セレモニーには、当機構の岩橋理事長、田村総主事が出席、現地駐在の小西とともに多くの感謝の言葉をいただきました

ないの、なぜ学校に来ないの。勉強を続けなくちゃだめよ！」と私を励まし、毎回私の父親に“シリラを学校へ行かせて下さい”と説得してくれました。とても嬉しかったです。」

この感謝のスピーチで何人もの方が、歴代の日本人スタッフの名を上げておられたのが印象的でした。清水美穂スタッフ、藤倉恵子スタッ

里子家庭訪問

標高4,400mに位置するチャヤから車で40分ほど行ったところのパルコマ村で、里子として支援を受けてきた2軒の家庭を訪問しました。里子の2人は、現在中学2年生で、平日はチャヤにある学校寮に住みながら学校に通っていて、週末は実家で過ごしています。

テレサちゃんの夢は数学の先生、エステファニアちゃんの夢は弁護士です。でも、その前に「ちゃんと高校を卒業したい」2人ともそう話



テレサとお母さん②、案内した小西

してくれました。高校に行く事が普通でないこの村で、「高校卒業」はとても難しい事です。家庭が貧しいことに加えて父親の蒸発、母親の病気などで子ども達が学校に行けなくなることがよくあるからです。

エステファニアの父親は蒸発しましたが、「里子にしてくれた川井

里親さんに感謝します

さんのおかげで学校に行けている事を本当に感謝しています。これから私がしっかり学べるようにお祈りをお願いします」と、犠牲を払って支援してくださっている里親の方に感謝していました。

「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。」（詩篇121：1、2）



エステファニア②とお母さん

FHスタッフがエステファニアのお母さんを励ました聖書の言葉です。世界里親会の働きは子どもだけでなく、その家族にも励ましを与えています。世界には、まだまだ沢山の子どもたちが学校に行きたくても行けない状況の中で将来を悲観して歩んでいます。子どもたちに学びの場と明るい未来への希望を運ぶために、あなたも是非里親になってください。（吉本愛美）

新たな支援を始めます
里親さん
募集開始

世界里親会では、2012年1月よりボリビアに新センターを2カ所開設して、子どもたちへの支援を始めます。アサワニ地区、リオカイネ地区で、併せて250名の里子候補がおります。いずれの地域も「何もなかった12年まえのチャヤ」と、ほぼ同じ状況にあります。この2つの地区の子どもたちに将来の希望を与え、地域の変革を実現するために、ぜひ里親としてご支援をお願いいたします。皆様からのご連絡をお待ちしております。



支援のお問い合わせは大阪事務所
☎072 (920) 2225まで
ウェブからも申し込みできます



里子たちによるマーチングバンドの演奏で式典が開幕



生活物資支援倉庫で生まれた

「絆」

倉庫にかかわって下さったみなさん
ありがとうございました！



2011年10月31日、JIFH物資倉庫での配布が最終日を迎えました。この日は特別にカフェ・スペースを設置、今まで物資を取りに来て下さった方々とボランティアの皆さんがコーヒーや紅茶を飲みながら、生活の状況や倉庫での思い出を話しあったり、他愛もない会話に笑いあったり、本当に温かい交流の時を持ちました。

当機構は震災直後の4月に、仙台市泉区に物資倉庫を構え、全国の皆さんが送って下さった支援物資の配布を開始しました。毎日届けられる大量の支援物資は、倉庫周辺の地元のボランティアさんが仕分け作業を手伝って下さり、全国からのボランティア、地元のキリスト教会やNGO救援団体と協力しながら、必要としておられる各地域の避難所や住宅地などでお配りしました。物資がつまった段ボール箱の表に東北応援の熱いメッセージが書かれていたり、箱

の中に物資と共に心温まる手紙や子どもの絵が入っていたりして、被災された方々もボランティアも共にとても励まされ、胸が熱くなりました。

被災者との心の交流も

5月からは若林区にある運送会社、仙台丸周さんの倉庫の一角をお借りすることができました。ここは避難所や被災された方の家が周辺に多いことから、物資を必要としておられる方が直接取りに来て頂けるようにしました。また倉庫の運営は、前の倉庫から関わってくださっていた地元のボランティアさんが引き続き助けて下さり、全国のボランティアの方々に支えられて、共に物資をお配りすることができました。そのうちに、ただ配るだけでなくその中で何気ない日常の挨拶が交わされ、自然と会話が生まれるようになり、いつしかボランティアと被災者の方々との間に心の交流が持たれるようになりました。倉庫に来られた被災者さんは、5月から10月までの6ヵ月間で11,695組でした。

倉庫の最終日、被災者の方から、次のようなメッセージを受け

取りました。「今まで、本当にありがとうございました。本当に本当に感謝です。ここに来て、また明るい自分に戻れました。これからも、がんばるので、見守って



津波で被災した巨摩の写真を見せる方

て下さい」。

最初は物資を受け取ることが目的で来ていた人々が、いつしか人と人とのふれ合いを求めて、ボランティアの方とおしゃべりをするために来て下さるようになっていました。またボランティアの健康を気遣い、優しい言葉をかけてくださる方、お菓子やジュースの差し入れをしてくださる方、手料理をごちそうして下さる方など、たくさんの感謝と愛にあふれた倉庫となっていました。これからも、がんばって歩んでいこうとする東北の方々に寄り添い、精一杯応援していきたいと思います。

(報告：吉田知基)

巨理町を中心に活動が続けてきた熊田牧師



宮城県南部に復興支援拠点が誕生

巨理聖書キリスト教会

被災地の町に希望の光を灯すために



11月19日(土)、宮城県巨理郡巨理町で「巨理聖書キリスト教会」の(熊田康之牧師)開所式が行なわれました。

この建物はもともと津波で1階まで浸水し、大きなダメージを受けた個人の住宅でした。同地区でボランティアリーダーとして支援活動が続けていた熊田康之牧師が、「この建物を支援活動のために使わせて欲しい」と願い、所有者の向後氏から快諾を得て、当機構と共にボランティア活動の拠点としていた場所です。

巨理町での住宅補修や地元漁師さんへの復興支援活動を拡大していく中で、この建物の改修も進め、所有者の希望もあって新たにキリスト教会と地域復興のボランティアセンターとして誕生するこ

とになりました。

地元住民からも期待の声

開所式当日は、当機構のボランティアによって建物の泥だしや補修をさせていただいた被災者さんたち、またそれを応援して下さった地元の方々を始め、全国各地から教会の牧師、ボランティア等80人以上が参加、椅子が足りなくなるほどでした。

熊田氏は「JIFHを通じて国内だけでなく海外からも多くのボランティアの皆さんが継続的にここでの活動を支え続けてくださり、その中で自分が牧師としてさらに地域の人々に仕えていくことを決意しました」と挨拶。

その後、熊田さんを支える牧師らによって牧師任命式、続いて来

会した多くの方々から温かい励ましや今後の期待の言葉が贈られました。また地元のお母さんたちの手による名物「はらこめし」も振舞われ、新しい門出を祝う多くの人々に喜びと笑顔が広がっていました。

同教会の屋根には韓国から届けられた十字架が白く輝いています。ボランティアの拠点としても地元の希望の光となるように又、地元の方が語ってくださった「ここが地元に根ざした教会になって



同教会では支援活動の一つとして近隣の仮設住宅を訪問、この日は焼き鳥とコーレ

ほしい」との思いが実現することを願います。



当機構は東日本大震災の緊急および復興支援活動の一環として、また「物心両面の飢餓対策」のビジョンのもとに、同教会の開設を応援させていただきました。今後は、「熊田康之を支える会」で運営が続けられていきます。